

松風の創業者 松風嘉定について

美術陶磁器から人工陶歯まで

Kajo Shofu Who Established as Shofu Dental Mfg. Co.

Development of from the Artistic Piece Ceramic Pottery to the Dental Artificial Porcelain Teeth

今村 嘉宣

キーワード：松風嘉定、松風、歴史、陶磁器、人工陶歯



(いまむら・よしのぶ)
ICDフェロー

I. はじめに

諸先生よくご存知の歯科材料メーカー「松風」(Shofu)の本社は京都市東山区福稲のJR奈良線の東福寺駅近隣、鴨川と琵琶湖疎水の流れとともに師団街道沿いにある。南には伏見稲荷大社がある。

この「松風」は松風嘉定(しょうふうかじょう)が大正11年(1922年)に松風陶歯製造株式会社として創立させたもので、爾来創業93年を迎える歯科材料業界において屈指の老舗である(図1)。

松風は元々明治時代に京都清水坂において代々輸出用陶磁器製造を生業として興り、後に窯業メーカーとして碍子や化学磁器を作っていた。現在の松風の創業者松風嘉定は三代目(名を代々嘉定と称し、かじょう、かていと変遷している)で、企業家として焼きものを作る陶工から身を興し、その類い稀なる才能とたゆまぬ努力により明治中期から殖産興業に傾倒し、輸出用陶磁器を始め、近代化された工場にて高電圧碍子(がいし)、化学磁器などの窯業製品を製作する松風工業という一大産業の礎を京都に築き、日本で最初の高級陶歯の製造を行い、小資本による工業組織に成功した先駆者とされる人物である(図2)。因みに京セラを興した稲盛和夫氏はこの松風工業の出身である。

II. 松風家の系譜

1. 初代松風嘉定(しょうふうかじょう)

〈僧より転じた製陶家〉

尾張の国鳴海出身で山科小栗栖の寺の住職をしながら半僧半俗の托鉢生活をしていた。筆墨の道にも長



図1 現在の松風本社
fig. 1 Shofu Dental Mfg at present



図2 三代目松風嘉定
fig. 2 Kajo Shofu (3rd) portrait photo

けた僧で、趣味で陶芸を学んでおり、学問は和漢に通じ、美術品に対する鑑識の眼力は時流を抜く存在であった。清水坂に移り嘉永元年（1848）ごろから製陶業を本業とする。当時、磁器の多くは概ね中国より渡来のもので原材料は国内で入手が難かったが、初代は磁器の将来を見込んでその製造研究に傾倒した。

「松風」家名の由来は諸説あるが、清水寺御詠歌の「松風や音羽の瀧の清水を結ぶ心は涼しかるらん」からとされている。

2. 二代目松風嘉定（嘉響）〈清水における輸出磁器製造の嚆矢〉

尾張国東春日井郡大泉村の山田家の出身。天保13年（1842）に生まれる。瀬戸で製陶を学び、三代目嘉定実父の井上延年と仲間であった。経営の才能があり、慶応2年25才の時、初代嘉定にその腕を見込まれ、養子として二代目となる。文久元年より磁器の製作を始める。明治元年（1868）より陶磁器輸出を計画し、少数工芸品より大量の工業製品の製造に興味を持ち、天草陶石を磁器の原料として製造を始めるが、明治8年（1875）頃より内地向けの磁器製造から海外輸出の磁器の製造に着手した。京都の磁器製造の率先者の一人である。

明治11年（1878）ドイツ人のゴットフリート・ワグネルが京都舎密局（せいみきょく：オランダ語の化学



図3 三代目松風家族写真（松風嘉定伝より）
fig. 3 Shofu (3rd) family photo in 1921

セミストリが変じたもので、石鹼、ガラス、七宝焼などを製造）に西洋釉薬導入ならびに七宝焼指導のため赴任したが、二代目嘉定はワグネルの製陶方の御用係をしていた。この二代目は瀬戸の技法をもって京都の陶磁器の改良に努めた人である。先代より雅号「松風亭」としていたが、後に「嘉響」と号した（図3、4）。

3. 井上延年（三代目嘉定の実父）

天保13年瀬戸の井上家に生まれる。井上家は慶長以来瀬戸で陶業を営む家系であり、延年は幼少より名陶工川本治平の弟子となり、芸術肌の職人で数々の技法を編出し、独自の妙味を出し独創の天才陶師と云われた人であった。朝鮮、支那の茶碗の写しなどの焼物を作り、他の追従を許さぬ技量で、明治13年（1880）5月愛知県博覧会へ行幸の明治天皇の御前で作陶を供覧した。のちに宮内庁大膳職の御用も承る。

後年、瀬戸で相弟子であった旧知の友二代目嘉定を頼り京都へ出向き、明治20年（1880）京都陶器株式会社へ勤務する。明治26年（1887）に五条坂にて陶器製

造を営む。爾来「墨松亭」と号した。明治33年(1893)東京高等工業学校(現在の東京工業大学)へ招かれ指導した。延年の作品は出身地である瀬戸歴史民俗資料館や愛知県陶磁器資料館に展示されている。

Ⅲ. 三代目松風嘉定<窯業を近代工業化した先駆者>

1. 三代目嘉定の略歴

明治3年(1871)に瀬戸の陶工井上延年の長男常太郎として瀬戸に生まれる。

明治11年(1879)常太郎8歳の折、名古屋の博覧会に行幸の明治天皇の御前で国貞県令に選ばれ、獅子の小面をお捻りにてご披露する。山高信離ご説明「天上の石麒麟」と賞賛される(図5)。陛下より御賞詞賜る。瀬戸美術学校を卒業し、一時東京の井上良斎方に滞在する。伏原有文に英語や漢文の指導を受ける。

明治21年 京都陶器株式会社に就職。

明治23年 二代目嘉定長女と結婚し三代目嘉定となる。

明治25年 京都陶磁器商工異組合設立に尽力し設立する。先代より「松風亭」と号していたものを廃し「松風」と号する。

明治39年 松風陶器合資会社を設立する。社長就任。

名古屋に支店を開設。陶磁器界への尽力と功を評され知事より表彰さる。京都伊紀郡深草福稲小字岸の上に新工場建設。化学磁器製造、陶磁器増産を行い米国で名声上る。

明治41年 新工場に洋式倒焰式圓窯設置し稼動開始。
明治43年 松風陶器合資会社の社報となるタブロイド版の私報を発刊。10月東宮殿下、深草の工場へ行啓。宮内省より皇室御用器製作の御用命承り、菊御紋章入り洗面器を謹製。

明治44年 京都市陶器試験場附属徒弟養成所設立に尽力。国立陶器試験場誘致。

大正元年(1912) 金沢の日本硬質陶器(現在のニッコウ陶器の前身)社長に就任。

大正4年 1月販路拡大のための商況視察と陶磁器製造の調査を兼ねて渡米。ニューヨークで留学中の岡田満(後の慶応大学医学部初代口腔外科教授)と面談、後に人工陶菌を松風で製造する荒木紀男を紹介され、日本での人工陶菌製造・研究を依頼。

大正5年 松風陶器合資会社設立10周年記念祝賀会。緑綬褒章を授与。

大正6年 松風工業株式会社を設立。石英碍子の研究・



図4 二代目松風嘉定(嘉響)作品の茶碗
fig. 4 Tea cups by Shofu (2nd) Kakyo

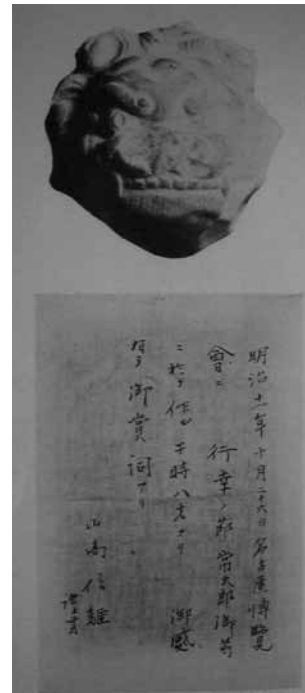


図5 三代目松風嘉定少年時代の「獅子面」作品
fig. 5 Lion face pottery by Gajo shofu (3rd) in boyhood



図6 清水坂の旧松風邸（現：清水順正）

fig. 6 The old Shofu residence still stands at Kiyomizuzaka Kyoto at present

製造に着手。

大正7年 松風陶歯研究所を設置。
脇本十九郎に「仁清、乾山、木米伝」執筆を依頼し三名工を顕彰。

大正8年 (1926) 京都帝国大学工学部建築学科教授武田五一氏に清水坂に和洋折衷の住居用洋館建築を依頼。この旧住宅は大正モダニズムの粋を集めた洋館で、今でも清水寺山門近隣の清水坂に有形文化財として現存。（現：清水順正おかべ家五龍閣）（図6）

大正10年 11月「京都洛陶会」の東山大茶会を催す。日本初の立礼式点茶を実施。東山界隈の著名人所有の陶磁器逸品を公開させる。

大正11年 5月松風陶歯製造株式会社を設立し社長に就任。荒木紀男専従で人工陶歯製作にあたらせる。

大正12年 関東大震災。電力復旧のため無償で碍子を東京へ提供。

大正14年 3月日本資本家代表として第7回国際労働会議・第3回万国商業会議所総会に参加のためジュネーブへ出張。11月豊国神社再興50年奉祝祭および北政所三百年祭に尽力。

昭和元年 日本産業協会総裁伏見宮殿下より表彰。

昭和2年 京都陶磁器商工同業組合長に就任。9月体調不良病床に臥す。

昭和3年 1月肺炎のため逝去。従六位に授叙位。東山「高台寺」（臨濟宗の鷲峰山高臺聖寿禪寺おねねの寺）に眠る。（墓所は料亭「菊乃井」の真上で祇園を一望できる場所でおねね廟の近隣。）

2. 三代目嘉定の産業基盤の転換（木炭から石炭へ）

明治後半より天草より大量の陶石を仕入れ、原材料の安定した供給をはかる。松風焼はとくに米国人の嗜



図7-a 清水坂の工場での陶磁器製造風景

fig. 7-a Shofu first pottery factory in the past at Kiyomizuzaka Kyoto



図7-b 松風陶器合資会社新工場風景

fig. 7-b Shofu (Joint-stock company) renewal pottery factory in the past at Kyoto



図8-a、b ナセル・D・ハリリ コレクションで紹介された松風の花瓶
fig. 8-a、b One of Nasser D.Khalil collection Shofu vase

好に適し、次第に注文が夥しくなった。その頃の松風焼は、品質においても相当改良が施され、図柄も好評で実用品として歓迎される。しかし嘉定は、受注が増える一方で清水坂界限にて生産することは、燃料運搬の経費が高むのと煤煙で山紫水明の風光をそこなうことは心なき業であり、観光化する東山一帯の繁栄を削ぐことになるとう見地から、初代以来製造の根城とした清水坂の工場を京都の風光を害しない土地へ移転する決心をし、明治23年に琵琶湖疎水が完成し水運が向上したこともあり、また煤煙による公害、環境破壊、清水寺の観光への障害などを案じて東山区福稲へ移転した。その後明治39年に至り、益々ヨーロッパでの好調な販売増加でヨーロッパ式の石炭窯で大規模な工場組織に改変を企てる。焼成法の改良は大変であったようで、一時輸出製品の製造が低下する。一方絵付けのばらつきを無くし一定の品質を保持する見地から転写印刷をあみ出した。しかし当時第一次世界大戦が始まり戦時下での輸出の舵取りは難しかったようだ(図7-a、b)。

3. 三代目嘉定の陶磁器作品

娘婿の藤岡幸二が編纂した「聴松庵主人伝」や「京焼百年の歩み」によれば、「明治29年ころ磁器の表面の図柄を盛り上げにより付着させる方法を考案し「都盛」と名付けた釉下彩の陶磁器で名声を得ていたとある。

作品の数々は、後絵付けではなく、釉薬を塗布し窯

で窯変させて色を出した「釉下彩」なるもので、コバルトの青色やクロムによる深緑色のもので、窯の加熱温度管理が難しく、様々な色彩を出すのに苦勞する陶磁器である。彩色は西浦焼きとも共通する。

三代目嘉定の製造した陶磁器は概ね輸出陶磁器であったため、今日国内には作品もあまり残っていない。唯一本邦では「ナセル、D、ハリリ コレクション・海を渡った日本の美術 陶芸編・上」により紹介されたのが初めてである(図8-a、b)。その後近年になり、近代輸出陶磁器への再評価が近代国際陶磁器研究会によりされるに至り、再評価される。現在国内にある「松風」銘のある作品はほとんどが欧米からの「里帰り」ものである。また大正時代から製品は京都で素焼きし、名古屋の支店で絵付けをして輸出されたことから、京都にその作品は少なく、また第二次世界大戦により輸出陶磁器が衰微し、名古屋が戦禍に遇い、松風の美術輸出陶磁器は失われるか散逸した(図9-a~g)。

現在は京都松風本社応接室に松風家が所有している十数点が展示されている。小さな花活け等は稀にオークションサイトで見ることができる。

4. 松風の経営の変遷

(1) 松風陶器合資会社 明治39年(1906)4月設立

この会社は三代目嘉定が、明治39年に二代目嘉定から引き継いだ森村組の輸出用陶器製造をやめて独立し、大量生産を目論み松風個人の工場にて近代式の工場経営を計画し設立したもの。同時に名古屋の白壁町に支店と絵付け工場を開設した。輸出陶磁器 理化学磁器、高電圧碍子など製造する。薪材を燃料とする錦窯を電熱に改めて時代の先鞭をつけた。化学磁器を「SCP」の商標で発売する。(※「SCP」Shofu Ceramic Porcelain) (図10)

(2) 松風工業株式会社 大正6年(1917)12月設立

日本の急速な工業化推進のため水力発電発展の必要から碍子の需要が伸びる。碍子は日本碍子と市場を競合、理化学磁器ではドイツ製品と市場を二分する(図11)。

電気用陶器(碍子等)、化学磁器、輸出用陶磁器、電気用その他諸器械ならびに材料陶器原材料・燃料の採掘製造販売、計器類、電気用器、一般絶縁物の製造、師団道路三の橋(福稲上高松町)に第二工場増設し、



図9 三代目松風嘉定の輸出陶磁器の作品の数々
 a: 釉下彩都盛「朝顔絵」蓋付壺 W190×H130 (個人所蔵) / b: 釉下彩都盛「鶴絵」花瓶 W85×H190 (個人所蔵) ウランブラック フェルガソナイト使用 / c: 釉下彩「花絵」花活け5点 (クロム緑) H150 (個人所蔵) 百合画の1点下絵が類似 / d: 釉下彩都盛「富士山」花瓶 W230×H300 (個人所蔵) / e: 釉下彩「朝顔画」鉢 W184×H95 (個人所蔵) / f: 松風本社に展示されている作品の数々
 fig. 9 The pieces of ceramic vase and pot for export



図10 松風陶器合資会社私報 第一号

fig. 10 Shofu Pottery Factory newspaper (1st edition)



図11 松風の高電圧碍子（東京工業大学所蔵）

fig. 11 High tension Insulator made by Shofu (property in Tokyo Institute of Technology 100year Museum)

米国GEより10万ボルトの電気絶縁試験機を購入する。

三代目嘉定没後、戦況悪化に伴い衰微、松風工業は戦後製造を縮小し、碍子やコンデンサー作製に転換、戦後は進駐軍により接収された。陶磁器は昭和10年頃まで名古屋支店を中心に作陶されていたが戦時下で中



図12-a 松風陶歯製造株式会社（1922年）

fig. 12-a Shofu Dental Mfg in 1922



図12-b 陶歯金型

fig. 12-b The old press mold for porcelain teeth

断、軍需物資（火薬調合磁器、南方への濾水器や陶磁器製手投げ弾）を製造したが、戦後接収され陶磁器部門は松風陶器株式会社として復興したが衰微。（当時の意匠はShofu made in occupied Japanとなっている）

(3)松風陶歯製造株式会社 大正11年（1922）5月設立
現在の松風

三代目嘉定は欧米視察や京都陶磁器試験場より歯科で使用する陶歯の製造が有望であると聞いていたため決断。前述のとおり米国で知り合った東京歯科医学院（現在の東京歯科大学）卒業後、奥村鶴吉先生を頼り渡米し歯科技工を学び修業技工所をニューヨークで開業していた荒木紀男を大正7年に帰国させ、松風陶歯研究所を設立し、4年の歳月をかけ人工陶歯製造にいたる。資本金100万円 従業員40名。次男松風憲二に経営を任せる（図12-a、b）。

IV. 我が国における陶歯製造の経緯

我が国で最初に自家製の陶歯を作ったのは木床義歯

を作っていた法印渡邊良斎である。良斎は西洋歯科医学を学んだ高山紀斎先生に西洋陶歯を勧められても拒み、独自に陶歯を作り明治23年陶歯の特許を得て翌24年に有孔陶歯と洋銀（Cu-Ni-Zn）鋳陶歯の製作を発表し特許を得ている。明治26年には歯頸部に焼量をした陶歯を同じく発表して特許を得ている。しかし工業化して大量生産はしなかった。

一方、国産では名古屋や美濃で小規模ながら家内工業的に何種か作られていた。中でも有名なのは明治17年（1884年）に宿澤 肇（いずみ）が作った美濃陶歯である。これは明治の初年頃、山梨県七里村（塩山近隣）出身の宿澤が、生糸商をしていた叔父に連れられて横浜に出た折に偶然にも西洋歯科医学の外国人歯科医師が義歯治療に使用していた人工陶歯を偶然にも見て興味を持つ。直ちに外国人歯科医のもとへ弟子入りし陶歯の作製を始めた。その後、瀬戸で美濃歯を作っていた水野某という人物に長石を用いた人工歯を作ることの指導を受け、当時最も陶業が盛んであった美濃（岐阜県駄知）に移住し、欧米の人工陶歯をまねて作る努力をする。そして瀬戸ポロ石とよばれる長石を主原材料とする人工陶歯を明治17年頃完成する。この陶歯はいわゆる練り込み式で基礎部（歯頸部）と被覆部（歯冠部）とが混じりあったものであって、今とはおよそ異なった英国式と呼ばれるものを独力で創製したものであっ

た。宿澤は明治23年に陶歯として完成させ、明治24年には有孔陶歯とピン付き陶歯を作っている。製法は陶器の製法に倣い、陶土で石膏型の上で歯を作り、素焼きにして釉薬を天然歯に模し、窯で焼成したものであったが脆弱なもので、長期の使用に耐えられなかった。この陶歯は明治20年代後半が全盛期で名古屋の千種区に工場を建て、本格的に宿澤陶歯として製造販売し財をなした。当時名古屋で4頭立て馬車に乗っているのは名古屋市長と宿澤だけだった。しかし意匠登録と商標登録をしなかったため、紛い物や同じ製品でも別の商標で売られ宿澤の陶歯は徐々に衰退した。その後、珪石・蛙目・チタニウムの粉末で高温焼成して半透明化した陶歯を作って明治37年特許をとった。この製法は大正8年ぐらいまで駄地町の日比野清一氏が継承したが、その翌年大正9年には中止している。この頃には国産陶歯の製造業者は愛知県下の春日井周辺で30余名、岐阜県下で2～3名であったようだ。今日のものに較べるとやや脆弱で口の中で強く噛み締めると割れるものであった。さらに珪石・蛙目・チタニウムの粉末で高温焼成して半透明化した陶歯（実際は磁器：磁歯）を作って、明治37年特許をとった。いずれの人工陶歯も十分な臨床家や大学研究者に正しい評価を受けず脆弱なものを販売していたため、多くの臨床家は米国からの高価な輸入陶歯を使わざるを得なかった（図13-a、b）。

明治28年の第四回国内勧業博覧会審査第五部歯科医学に関する出品の審査を担当した高山紀斎はその翌29



図13-a 宿澤陶歯

fig. 13-a Shikusawa porcelain pinless teeth



図13-b 宿澤お歯黒陶歯

fig. 13-b Shikusawa black-colored porcelain pinless teeth



図14 初代慶応大学医学部口腔外科 岡田 満教授
（榊原悠紀田郎著 歯記列伝より転載）

fig. 14 Prof. Mituru Okada of Keio Univ., Sch. of Medicine Dept. of Oral Surgery



図15 ニューヨーク時代の荒木紀男と野口英世（榊原悠紀田郎著 歯記列伝より転載）

fig. 15 Norio Araki and Dr.Hideyo Noguchi at New York

年に細かく報告している。中でも人工歯については陶歯と呼ばず「磁歯」と表現して、以下のように述べている。

「今回出陳シタル列品中磁製歯ヲ出品セルモノ数種アリ、然レトモ其ノ形状色澤硬度及ピンノ形状皆学理的応用ニ乏シク岐阜県ノ出品ニ係ルモノ稍見ルニ足ルモ亦素質軟ニ過キ未タ完全ト云ウベカラズ、其大阪ヨリ出品セルモノ、如キハ品位頗ル劣等ナリ…咀嚼ノ用ヲ為サズ…色澤不良若シクハ硬度宜シクヲ得ズ硬固ニ過ギ義歯製作ノ中加熱ニ遇イテ破碎シ易ク軟柔ニシテ咀嚼中磨耗スルニ至ルスナワチ米國ノ某会社ノ如キハ歯科専門医ヲシテ之ヲ作業ヲ管理セシメ研究日モ尚足ラズト」そして磁歯の要点として第一形状、第二色澤、

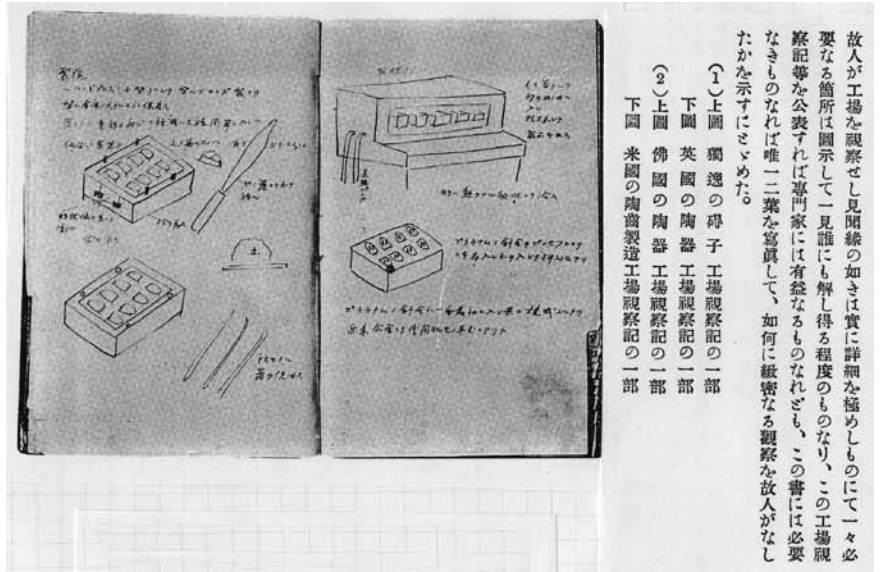


図16 米国の陶歯製造工程をメモした松風嘉定のメモ
fig. 16 Shofu note of producing process by S.S.White for porcelain teeth

第三素質、第四強度、第五材料、第六ピンおよび軸孔」とそれぞれの要件を挙げている。

V. 松風での陶歯製造の起こり

一方の松風は、前述のように大正4年に嘉定が米國に渡米した折に、ニューヨークで親友の瀧藤次三郎を訪問し、留学中の岡田 満より荒木紀男を紹介され、日本での陶歯製造の企画を持ちかける(図14)。

この荒木紀男は、明治18年長野県飯山の出身で明治33年高山歯科医学院の書生となり、血脇守之助が高山歯科医学院を改め東京歯科医学院となった後も修学し歯科医師となった。明治38年に奥村鶴吉を頼り渡米。農作業労働をしながら奥村鶴吉を頼り、東海岸をめざ



図17 松風の最初の陶歯（東京工業大学所蔵）
a：ニッケルピン付き陶歯 b：白金ピン付き陶歯 c：有孔ゴム床用陶歯

fig. 17 Shofu original porcelain teeth display (property in Tokyo Institute of Technology 100year Museum)



図18-a, b 発売当初の松風陶歯のパムフレット 2枚並列
fig. 18-a, b Shofu original porcelain teeth pamphlet

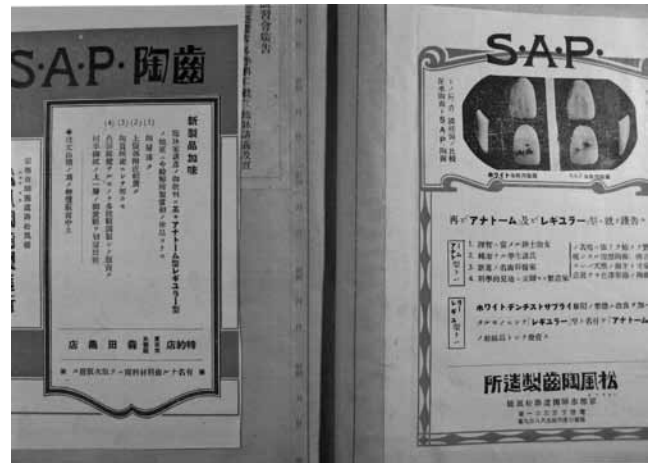


図19 発売当初の松風陶歯の箱のパッケージ
fig. 19 Shofu original porcelain teeth box package



図20 歴代の松風の商標
fig. 20 Shofu Trademark in each generation

す。ペンシルバニア大学留学中の奥村鶴吉を訪ね、相談。米国での歯科医師を目指すことを諸事情から諦め、歯科技工の道に進む。当初は野口英世のアパートの一室で同衾する (図15)。

歯科技工学を修めた後、歯科技工所 Stowe & Eddy Coへ入社しポーセレン部門で、副所長まで勤めた後に独立。大正4年 ARAKI DENTAL LABORATORY 開設していた人物である。

さて、ニューヨーク滞在中松風嘉定は荒木とS. S. Whiteの陶歯製造工場を見学し、記名簿にサインする際、「Shofu」では露呈するので、日本からきた歯科医として申告して「Dr.Matukaze」と記帳し、各部門を二度も見学して、洋服のポケットに大量の原材料サンプルを忍ばせてホテルへ戻ったと後述談にある (図16)。

荒木紀男がどのくらいの出資をしてくれるのかと尋

ねると、百万や二百万圓は出すと答えたそうである。その結果、荒木は陶歯製造に必要な研究費を与えられ、数年かけて研究を行い、大正7年12月油窯と長石一樽抱えて米国人の妻と帰国する。

直ちに松風陶歯研究所を松風工業内に設置し、東京歯科医学専門学校教授の小野寅之助博士の指導を受けながら、日本人にあう適当な形態と色の研究を続けた。その研究結果は大正10年6月の日本歯科医学会総会で紹介された。

遂に大正11年アナトーム陶歯と称する白金ピン付金床陶歯を発売する。次いで大正13年にはニッケルピン陶歯、材質的には磁器の人工歯を発表し発売となる。この時ニッケルピンが高温焼成によって酸化を防止する薬を塗布することを考案したのは、嘉定自身であった (図17~19)。

このような訳で松風陶歯製造株式会社の初代の商標は、ゼーゲルコーン (窯の中での焼成温度を見計る円錐の高温測定用具) を展開して作られた三角形を三方に展開したものの英語で「SAP」(Shofu Araki

Pocelain) とある。そして二代目は前歯ピン付き陶歯断面の模式図である。ちなみに現在用いられている三代目のロゴマークは地球環境維持を訴えたエコロジー的発想で地球を模した水色ものである(図20)。

余談であるが、荒木紀男は戦後、松風を退職し、昭和年代後半から30年代に、上野稲荷町にレジン人工歯製造の日本デンタル株式会社を設立。朝鮮動乱時、慶応義塾大学病院眼科の桑原安治助教授の依頼を受け、銃創で負傷した米兵のためにレジン製の義眼の作製にあたる。

同時に愛歯技工専門学校の鹿毛俊吾との交友からポーセレン技工技術の教育指導も兼ね、同校へ招聘され、中村廣次氏ら多くの後進を指導され、クワタパシエント桑田正博氏が米国へ留学される切掛をつくる。また松風銀座サロン時代から河辺清治先生とも親好を深めた。

このように、今日我々が使用している人工陶歯は、一陶工から起業した三代目松風嘉定により企画され、荒木紀男が製造し、高山紀斎、血脇守之助、岡田満、小野寅之助らの多くの先生の指導のもと日本で最初に作られ、今日へと脈々と継承されてきている。尚、その後の松風における人工歯開発の歴史的経緯については文献40)の佐藤浩一氏の論文に詳しく載っている。

諸先生も京都に学会や観光でお出ましになられることも多いと存じます。何かの折に歯科医療の材料メーカーである松風の人工陶歯開発の歴史の片鱗を京都の地で触れられるのも一興かと存じます。

参考文献

- 1) 今村嘉宣：松風嘉定について—美術陶磁器から人工陶歯まで—、近代陶磁、第6号：平成17年3月
- 2) 塩田力蔵：近代陶磁器と窯業、大阪屋敷書店：昭和4年
- 3) 塩田力蔵：日本陶工伝、雄山閣：昭和13年
- 4) 加藤唐九郎編：原色陶器大辞典、淡交社刊：昭和47年
- 5) 中ノ堂一信著：京都窯芸史、淡交社刊：昭和59年
- 6) 藤岡幸二著：京焼百年の歩み：昭和37年
- 7) 藤岡幸二編：松風嘉定伝「聴松庵主人伝」：昭和5年
- 8) 松風聴松庵遺愛品入札目録、服部来々堂：昭和4年
- 9) 「陶界の功労者松風嘉定逝く」記事、日本歯科新聞、第85号：昭和3年1月
- 10) 松風嘉定君逝く、故松風嘉定君略歴、大日本窯業協会雑誌、第36集、第422号：昭和3年2月
- 11) 松風憲二編：松風嘉定伝「松風嘉定」：昭和19年
- 12) 松風編：松風創立75周年記念誌：平成9年
- 13) 松風編：株式会社松風 会社の沿革について：平成元年
- 14) 岡佳子著：国宝仁清の謎：平成13年
- 15) 京都洛陶会編纂：洛陶会五十周年 陶と人：平成11年
- 16) 陶磁器・窯業文献目録 故藤岡幸二氏旧蔵資料を含む、京都府立総合資料館：昭和52年
- 17) 藤岡幸二：松風陶器合資会社事業概要 付製造順序概説 後の大正天皇皇太子時代の松風行啓に際して：明治43年
- 18) 松風陶器合資会社、私報、第1号～第4号：明治43年
- 19) 高木典利著：西浦焼：平成12年
- 20) ナセル、D、ハリリ コレクション 海を渡った日本の美術 陶芸編・上、同朋舎出版：平成7年
- 21) 愛知県陶磁資料館編纂：万国博覧会と近代陶芸の黎明：平成12年
- 22) 日本輸出陶磁器史 (財)名古屋陶磁器会館：昭和42年
- 23) 名古屋陶業の百年 (財)名古屋陶磁器会館：昭和62年
- 24) 矢部良明監修：日本やきもの史、美術出版社：平成10年
- 25) 平野耕輔著：恩師ワグネル先生の晩年
- 26) 明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料106 第四回内国博覧会審査報告第五部附録、明治文献資料刊行会：昭和49年
- 27) 京都産業界の恩人 ゴットフリート・ワグネル先生、第二回強と近代工業フェア開催協議会：昭和56年
- 28) 矢崎正方著：総義歯学、歯科学報社：昭和10年
- 29) 松風陶歯製造株式会社編：創立三十周年を迎えて：昭和27年
- 30) 松風陶歯製造株式会社編：歯業三十五年：昭和32年
- 31) 榊原悠紀田郎著：歯記列伝、荒木紀男、クインテッセンス出版：平成7年
- 32) 根本儀一：陶歯、日本之歯界、第39巻：18-52、昭和14年
- 33) 加藤一男：陶歯 人工歯の発達史、歯界展望、4巻3号：昭和32年
- 34) 尾道安治：日本陶歯の歴史(1~7)、歯科時報：昭和37年
- 35) 歯科用陶歯の巻(其の一其の二)、日本之歯界、3月4月号：昭和10年
- 36) 長谷川正康著：むしばのたはごと(上・下)、書林：昭和58年
- 37) 正木 正著：新編歯科医学概論、医歯薬出版：昭和50年
- 38) 荒木紀男氏を訪ねて4、日本歯技、58~61号：昭和48年
- 39) 奥村鶴吉著：野口英世伝「野口英世」、岩波書店：昭和8年
- 40) 佐藤浩一：人工歯に求められる形態と在能の考察、歯科技工、医歯薬出版、第41巻11号：平成26年

●抄録● 松風の創業者 松風嘉定について 美術陶磁器から人工陶歯まで
／今村 嘉宣

松風はもともと明治時代より京都清水坂において代々輸出用陶磁器製造を生業として興り、後に窯業メーカーとして碍子や化学磁器を作っていた。

現在の松風の創業者松風嘉定（しょうふう かじょう）は三代目で、企業家として焼きものを作る陶工から身を興し、その類い稀なる才能とたゆまぬ努力により明治中期から輸出用陶磁器を始め、近代化された工場にて高電圧碍子、化学磁器などの窯業製品を製作する松風工業という一大産業の礎を京都に築き、日本で最初の高級陶歯の製造を行い、小資本による工業組織に成功した先駆者である。

キーワード：松風嘉定、松風、歴史、陶磁器、人工陶歯

Kajo Shofu Who Established as Shofu Dental Mfg. Co.
Development of from the Artistic Piece Ceramic Pottery
to the Dental Artificial Porcelain Teeth

Yoshinobu IMAMURA, D.D.S., Ph.D., F.I.C.D.

SHOFU INC. was established in Kyoto on 19th as Shofu Dental Mfg. Co., Ltd by Kajo Shofu, who represented the third generation of the Shofu family in the ceramics industry. Before established Dental Mfg, Shofu made ceramics (High tension Insulator , pottery dishes and chemical porcelain tray etc.) for trading to export foreign country at Gojozaka Kyoto in front of Kiyomizu Temple since Meiji and Tisho Age (since the end of 19th to early 20th century).

Kajo Shofu developed the first original artificial porcelain teeth in Japan. And as an entrepreneur and researcher, he made it the mission of his new company to produce high-quality porcelain teeth one after another for the Japanese market.

Since its establishment, SHOFU has been committed to research and development, in order to manufacture innovative products for dentistry; this aim still characterizes the corporate spirit.

Key words : Kajo Shofu, Shofu, History, Ceramic, Porcelain teeth